読書カフェ　　2017.6.24

ユヴァル・ノア・ハラリ『サピエンス全史　文明構造と人類の幸福』上・下

（訳者・柴田裕之　河出書房新社　2016. 9）

目次：**第 1 部　認知革命**：第 1 章　唯一生き延びた人類種／第 2 章　虚構が協力を可能にした／第 3 章　狩猟採集民の豊かな暮らし／第 4 章　史上最も危険な種

第 2 部　農業革命：第 5 章　農耕がもたらした繁栄と悲劇／第 6 章　神話による社会の拡大／第 7 章　書記体系の発明／第 8 章　想像上のヒエラルキーと差別

第 3 部　人類の統一：第 9 章　統一へ向かう世界／第 10 章　最強の征服者、貨幣／**第 11 章　グローバル化を進める帝国のビジョン／第 12 章　宗教という超人間的秩序／第 13 章　歴史の必然と謎めいた選択**

第 4 部　科学革命：第 14 章　無知の発見と近代科学の成立／第 15 章　科学と帝国の融合／第 16 章　拡大するパイという資本主義のマジック／第 17 章　産業の推進力／第 18 章　国家と市場経済がもたらした世界平和／第 19 章　文明は人間を幸福にしたのか／第 20 章　超ホモ・サピエンスの時代へ／あとがき――神になった動物

・帝国とは何か

「第三部　人類の統一」の第 11 章は帝国を論じている。サピエンスは有史以来、帝国の歴史を生きてきた。著者は、帝国とは二つの特徴をもった政治秩序だという。帝国と呼ばれる第一の資格は、それぞれが異なる文化的アイデンティティと独自の領土を持った、いくつもの別個の民族を支配していることだ。第二に、変更可能な境界と潜在的に無尽の欲を特徴とする。帝国は自らの基本的な構造もアイデンティティも変えることなく、異民族や異国領を飲み込み、消化できる。帝国が多様な民族集団と生態圏を単一の政治的傘下に統一し得たのは、「文化の多様性」と「変更可能な国境」といった特徴をもっていたからだ。帝国は軍事的征服によるものばかりではない。自主的同盟（アテネ帝国）とか婚姻同盟（ハプスブルク帝国）というケースもある。アテネは 100 以上の都市国家に君臨し、アステカ帝国は、徴税記録から 371 の異なる民族を支配していた。しかし逆に、帝国は人類の多様性を激減させた大きな要因にもなったという。

現代は、帝国に対する批判が常識となっている。その理由は二つある。①長期的にみれば、多数の民族を効果的に支配するのは不可能だ。□支配できても、そうするべきでない。帝国は破壊と搾取の邪悪な原動力だからだ。どの民族も自決権を持っており、他の民族の支配下に置かれるべきでない。こうした批判はナンセンスだと著者はいう。実際に、帝国は過去 2500 年間、世界で最も一般的な政治形態だったからだ。帝国は安定した統治形態で、反乱は簡単に鎮圧された。一般に帝国の崩壊は、外部からの侵入、エリート支配層の内部分裂によってのみ倒された。征服された民族は、めったにそこから逃れられなかったし、征服者のよって、ゆっくりと消化され、固有の文化は消え去った。

確かに帝国を建設し、維持するために、戦争、奴隷化、組織的大量虐殺などが行われたが、価値あるものを残したことも事実だ。帝国のエリート層は征服から得た利益の一部を哲学、芸術、慈善などにまわした。庶民の世界においても、現代文化の大多数は帝国時代の遺産といってもよい。人類の文化的業績の相当部分は、被征服民の搾取に負っている。

帝国は、多数の小文化を融合させ、少数の大きな文化にまとめていった。そうして言語、貨幣の標準化が進んでいった。帝国には、被征服者に対して、それなりの正統性が求められる。被征服者が恩恵（法の執行、都市計画、度量衡の標準化など）を受けることができるように、優れた文化を広めることが必要となった。こうした文化の同化過程を通して、「私たち」と「彼ら」の二分法から離れて、支配者も被支配者も、同じように「彼ら」を「私たち」と見るようになった。

ヨーロッパ近代は、その優れた西洋文化を広めるという名目で地上の大半を征服した。その結果、それぞれの文化が西洋文化を採用するようになり、人権、自決権、自由主義、資本主義、共産主義、フェミニズム、国民主義が広く行き渡った。そしてヨーロッパの征服者たちに、今度は対等な地位を要求するようになった。

21 世紀に入り、新たなグローバル帝国への動きがみえはじめ、これまでの国民主義は衰えがみられる。人権を擁護して全人類の利益を守ることが政治の指針であるべきだと考えるようになってきた。地球温暖化は国民主義では克服できない。グローバル帝国の色はおそらく緑なのだと、著者はいう。いま、国家は、金融面での行動や環境政策、正義に関する国際基準に従うことが余儀なくされている。このグローバル帝国は多民族のエリート層に支配され、共通の文化、共通の利益によって、まとまっている。今後、国民国家に忠誠を尽くすのか、それともグローバル帝国を選ぶのか、考えなければならない時代になった。

・宗教という超人間的秩序

宗教は、貨幣、帝国と並んで、人類を統一する要素となっている。宗教は差別や意見の相違などの根源とみなされがちだ。しかし、社会秩序やヒエラルキーは想像上のものだから、脆弱なところがある。社会が大きくなればなおさらだ。宗教が担ってきた重要な歴史的役割は、こうした脆弱な構造に超人間的な正当性を与えることだ。宗教では、法は絶対的な至上の権威が定めたもの、とされる。そのおかげで、社会の安定が保証される。したがって、宗教は、超人間的な秩序の信奉に基づく、人間の規範と価値観の制度と定義できる。これには二つの異なる基準がある。□宗教は、超人間的な秩序の存在を主張する。その秩序は人間のきまぐれや合意の産物ではない。②宗教は、超人間的秩序にもとづいて規範や価値観を確立し、それには拘束力があると見なす。ただし、これだけでその能力を発揮できるわけではない。さらに二つの特性を備えねばならない。□いつでもどこでも正しい普遍的な超人間的な秩序を信奉している必要がある。②この信念をすべての人に広めることをあくまでも求めねばならない。つまり宗教は普遍的であることと同時に宣教を行うことが求められる。普遍宗教（世界宗教）とされるキリスト教、イスラム教、仏教などはそうした要素をもつ。しかし、古代の宗教は大半が局地的で排他的なものだった。普遍宗教は紀元前 1000 年紀（紀元前

1000 年から紀元前 1 年までのミレニアム）に現れ始めた。〔哲学者ヤスパースはこの時代を枢軸時代（『歴史の起源と目的』）と命名していた。〕これは歴史的屈指の重要な革命であり、帝国、貨幣の出現と同様に、人類の統一に不可欠の貢献だったと著者はいう。
ここでハラリは、アニミズムから一神教にいたる宗教の流れにふれている。狩猟採集民の時代はアミニズムが信念体系としてあった。人間の規範、価値観は、動植物や精霊、死者霊など無数の存在を考慮に入れたものだった。当然、局地的なもので、サピエンスと動植物とは対等な位置にあった。ところが、農業革命の結果、動植物は操作の対象となり、対等の位置から資産に格下げされた。しかし、動植物の完全なコントロール（増産、繁殖）などはできない。そこから超越的な神が生まれたという説がある。豊穣の女神といったものが登場し、古代神話の中心的役割を担うようになる。農業革命の進展の結果、今度は、王国や交易ネットワークが拡大する。その全体に力を及ぼす権威が求められてくる。それに応えるものとして、多神教の宗教が出現してくる。豊穣の女神や雨の神、軍神など、神々によって世界は支配されていると考えるようになる。多神教やアニミズムにも、神々の中に至高の神的存在がいる。例えば、ヒンドゥー教のアートマン（あらゆる現象、全宇宙の永遠の本質）のように。しかし、至高神は宇宙の一要素でしかない人間に関心など払わない。そこで人間に関心のある周辺の神々に利益を求めて病や勝利を祈ることになる。こうした多神教は、宗教的寛容性が高い。異教徒を排除したりしないところがあった。
一神教は紀元前 1350 年にエジプトで出現した。多神教であったエジプトで唯一神アテンをのみを祀ることをファラオ・アクナトンが制度化したことによる。しかし、失敗し、死後は多神教に戻ることになる。各地で局地的な一神教が登場するようになる。ユダヤ教もそうした一つであった。ユダヤ教の一宗派からキリスト教が誕生する。神が人類の救済のためにイエスをこの世に使わした（パウロの考え）、と唱えて、世界中に広がる。一神教信者は暴力によってあらゆる競争相手を排除し、自らを強化してきた。今日の東アジア以外の人々は何かしら一神教を信奉しており、グローバルな政治秩序は一神教の土台の上に築かれている。このあと、多神教によってもたらされた善と悪の二元論が語られ、一神教では悪の問題の処理がなかなか困難であることなどが論じられる。
　超自然的存在、神を置かない新しい宗教、インドのジャイナ教・仏教、中国の儒教・道教、地中海沿岸のストア主義、キニク主義、エピクロス主義などは、世界を支配している超人的秩序が実は自然法則の産物だとする。その中でも最も重要なものとして仏教を挙げている。仏教の第一原理は苦からどう逃れるかだ。苦は渇愛（モノ・生への執着、反転して死の欲望）から生じる。渇愛からの完全解放は、心を鍛えて現実をあるがままに経験することだと説く。仏教徒は、これを普遍的な自然の法則（ダルマ）だとみなしている。仏教が神々の存在を否定していないのは、苦が渇愛から生じるという法則に影響を持たないからだ。
宗教はここ 300 年の間、世俗化の流れにあり、次第にその重要性失ってきている。近代になって、自然法則の新宗教が多数台頭してくる。自由主義、共産主義、資本主義、国民主義、ナチズムなどイデオロギーと呼ばれるものを、ハラリは新宗教だとしている。ハラリは仏教

も共産主義も神という存在は信じないが、自然の不変の法則という超人間的秩序を信じるという点では同じだという。上記の近代のイデオロギーは、信念のあり方が神の不在の時代の信念（信仰）であるということだ。そして、それらの信念の間に様々な混合がみられる。例えば、アメリカ人は国民主義者であると同時に、自由市場主義の資本主義者であり、自由主義の人間至上主義者（サピエンス崇拝）でもあるというように。一方に全人類の平等を求める社会主義的な人間至上主義もある。ナチスのような進化論的な人間至上主義は、人種の最も進んだ形態をアーリア人種だとして、退化したサピエンスとされたユダヤ人、ロマ、同性愛者、精神障害者らは隔離され、皆殺ししてよいと主張した。

今、私たちは自由主義的な政治制度と司法制度を普遍的な性質をもつものと考えている。各個人の自由という信念が神聖視され、それが世界を意味づけ、また倫理的・政治的権威の源となっている。しかし、過去 200 年に、生命科学はこの信念を徹底的に切り崩してきた。人間の行動は自由意志ではなく、ホルモンや遺伝子、シナプスで決まると主張するようになってきている。

・歴史の選択とはどのようなものか

第 3 部の終章で、単一なグローバルな社会への変遷はおそらく、人類史のダイナミクスの必然的結果だっただろうと述べて、著者は歴史の持つ２つの特徴について語っている。

歴史は、どの時点をとっても分岐点があり、選択がある。歴史を決定論で説明することはできない。そこでハラリは、歴史は「二次」のカオス系だという。「一次」のカオス系には天気（気象現象）がある。多数の要因を考慮し、コンピュータ・モデルを構築して、精度の高い予測をすることができる。その際に予想の結果が天気に跳ね返ることはない。ところが「二次」のカオス系（例として石油価格を挙げている）では、もし 100%の精度で明日の相場で 10%価格上昇を予想することができるとしたら、儲けようとする人たちが買いに入り、その結果はすぐに石油価格に跳ね返って、価格は更に上昇することになる。結局、予測不能ということだ。歴史は結果から道筋を探って理解しても、そこには限界がある。後知恵的誤謬が入り込まざるを得ないということでもある。では、なぜ歴史研究をするのか。それは未来を知るためではなく、視野を広げて、現在の私たちの状況は自然なものでも必然なものでもなく、想像している以上に多くの可能性があることを理解するためなのだ。たとえば、ヨーロッパ人がどのようにアフリカ人を支配するに至ったかを研究すれば、人種的なヒエラルキーは自然なものでも必然なものでもなく、世の中を違う形で構成しうると、気づくことができると、著者はいう。もうひとつの特徴は、歴史の選択は人間の利益のためになされるわけではない。利益を計測できる客観的尺度などないからだ。キリスト教はローマ帝国の国教となり、現在 20 億の信者がいるからといって、確かに信者にとっては有益であっても、人類に有益かどうかなどわからない。歴史のダイナミクスは人類の境遇を向上させることに向けられてはいないと述べた後に、西暦 1500 年ごろに歴史は、それまでで最も重大な選択を行った。その選択は人類だけでなく地上のあらゆる生命の運命をも変えるもので、それが「科学革命」と呼ぶものだと著者は語っている。

▼資本主義と科学の結合がもたらしたもの（第 4 部　科学革命）

過去 500 年間の変化は驚くべきもので前例がない発展を見せた。1500 年の全人口は 5 億人、現在は 70 億人（14 倍）、1500 年に生み出した財・サービス総額は 2500 億ドル、現在は 60 兆ドル（240 倍）と拡大した。1500 年には、人類は 1 日あたり 13 兆カロリーのエネルギーを消費したが、現在は 1500 兆カロリー（115 倍）と増大している。この 500 年間にサピエンスは月に行くことができ、1945 年には原子爆弾を開発した。いずれも近代の「科学革命」の結果だ。14 章では、近代科学の性質に言及している。

・①無知の前提、②観察と数学、③新しいテクノロジーの開発

科学革命は知識の革命ではなく、無知の革命だったという。全知全能の神のもとでは科学の進展はない。進んで無知を認めることで、柔軟で、かつ探究的になっていき、世界の仕組みを理解しようとし、またテクノロジーを発明する能力が増大した。

近代科学には教義はない。共通の核となる研究方法はあった。経験的観察の結果を収集し、数学的ツールの助けを借りて、それをまとめることだった。伝統的な神話や聖典が一般法則を規定するときは、物語（ナラティブ）形式で提示された。近代科学の祖、ニュートンは『自然哲学の数学的原理』（1687 年）を著し、りんごの落下と流星まで、宇宙のあらゆる物体の動きを単純な数式に使って現し、物体運動の未来を予測できることを明らかにした。その発見から二百数十年後に次の物理学の革命が起こり、相対性理論と量子力学へと進んでいった。また生物学、経済学など複雑性を伴うものに対しては、統計学の発展で対処してきた。科学の発見とその新しい力は、進歩の可能性を開き、どんな課題も克服できると多くの人たちは思うようになる。貧困、病気、戦争、飢饉、老齢、死までもが避けがたい運命ではなく、無知の産物に過ぎないとした。

科学とテクノロジーは、もともと別領域のものだったが、資本主義と産業革命の到来が、科学と産業、軍事のテクノロジーを結びつけて、発展させた。科学にはお金がかかる。ほとんどの科学研究は、何らかの政治的、経済的、宗教的目標を達成するのに役立つと考えているからこそ、資金提供が得られる。科学は物事がどのような仕組みになっているか、未来に何が起こる可能性があるか、といったことを説明することができる。しかし、当然ながら、科学には、未来に何が起こるべきかを知る、そうした資格はない。宗教とイデオロギーだけが、その疑問に応えようとする。だから科学は宗教やイデオロギーと提携した場合のみ栄えることができる。イデオロギーは研究費用を正当化する。科学を特定の方向へ進ませるのは、イデオロギーと政治と経済の力である。その力となるものに帝国主義と資本主義があるという。

・科学と帝国の融合

英国王立協会の支援をうけてジェイムズ・クック船長率いる遠征隊一行は 1768 年に航海に出るが、1771 年の帰国時には、天文学、地理学、気象学、博物学、植物学、動物学、人類学など大量のデータを持ち帰った。その航海で発見されたオーストラリア、ニュージーランドは後に英国の植民地になった。科学革命と近代の帝国主義とは切っても切れない関係に

ある。1775 年にアジアは世界経済の 8 割を担っていた。中国とインドの経済を合わせると全世界の生産量の 3 分の 2 を占めていた。世界の権力がヨーロッパに移ったのは、1750 年から 1850 年にかけてで、ヨーロッパの相次ぐ戦争で、アジア列強を倒し、その領土を征服したときである。1900 年までにヨーロッパは世界経済を掌握し、世界の領土を数多く征服した。1950 年にはヨーロッパとアメリカ合衆国が世界の生産量の半分以上を占めた。それには、1850 年以降、ヨーロッパの支配は、軍事・産業・科学複合体と刷新されたテクノロジーを拠り所にしていた。ヨーロッパ支配を可能にしたものは、近代科学と資本主義であり、このふたつがテクノロジーを大きく飛躍させた。

中国の明朝の鄭和の大航海は植民地の確保につながっていない。クックのオーストラリアの発見が植民地につながったのはなぜか。ヨーロッパの帝国主義は「新たな領土」と「新たな知識」を求めていたということだ。ヨーロッパ人は 15、16 世紀の遠征でアフリカ大陸を周航し、アメリカ大陸を探検し、太平洋、インド洋を巡り、世界中に基地と植民地のネットワークを構築した。探検して征服するという無類の野心はヨーロッパ人独特のものだった。

・成長し、拡大する資本主義

帝国の建設にも科学の推進にも必要なのはお金である。資本主義の金融制度、中央銀行と預金準備制度、民間銀行の信用創造の機序を簡単な例を使って紹介している（P.128-131）。なぜ市中に流れるお金には、現金通貨（硬貨・紙幣）のほかに数字だけのお金（預金通貨など）があるのか。根拠なく創造されるお金、それは詐欺まがいのことだが、これを人間の驚くべき想像力の賜物とハラリは述べている。現在でみれば詐欺まがいだが、将来への信頼を担保していることで、流通しているというわけだ。この「信用（クレジット）」が私的利益を求める民間銀行で行われるところに問題があるのだが。では、将来の信頼を醸成するものは何か。それは経済の成長、パイの拡大にほかならない。

資本主義の第一の原則は、経済成長を至高の善であるとしている。正義、自由、幸福も経済成長に左右される。また近代科学の発展にも決定的な影響を与えてきた。逆に科学を考慮に入れずに資本主義の歴史を理解することなどできない。紙幣を発行するのは中央銀行だが、結局、それに見合った価値を生み出すのは科学者なのだ。近年の各国政府と中央銀行の紙幣濫発は、薄っぺらな信用を金融システムに注ぎ込みながら、バブルが弾ける前に、科学者・技術者に大きな成果（イノベーション）を生み出して欲しいと願っているというわけだ。

ヨーロッパ帝国主義は、この資本主義の信用システムを生み出した張本人でもある。ヨーロッパ人の世界征服のための資金調達は、税から信用を通じてなされるようになったことが大きい。コロンブスは起業家のように投資を募って船出し、投資家（国王、銀行家、商人）に富をもたらすことに成功した。このあとにオランダ、フランスの国力の盛衰が金融の動きとして紹介され、英国資本主義の覇権時代の到来が紹介される。ここでは資本と政治が結びつき、投資家の利益のための戦争が繰り返されたことも語られる。資本主義、自由市場の負の面として、近代前期に登場する大西洋奴隷貿易の話が語られる。18 世紀を通じて、奴隷貿易への投資の利回りは年率約 6%だったという。投資家の儲けはそれなりに大きかったと

いうわけだ。資本主義の強欲は、膨大な数の人たちを死に至らしめたという。イギリス東インド会社は、1000 万人のベンガル人の命よりも利益のほうが大事だった。このようにしてパイの拡大がはかられた。確かに 1914 年より 2014 年のほうが平均的な生活水準は飛躍的に改善した。しかしこのままパイは拡大し続けることができるのか。サピエンスは、遅かれ早かれ地球の原材料とエネルギーを使い果たすといった警告が破滅の預言者から出ている。これをどう考えるのか。

このあと「産業革命」が語られる。著者は動植物の命さえも機械化されているといい、人間至上主義の宗教は、サピエンスを神のような地位に祭り上げていると指摘する。

産業革命は人間社会に大激変をもたらした。都市化、小作農階級の消滅、工業プロレタリアートの出現、庶民の地位向上、民主化、若者文化、家父長制の崩壊などだ。更に重大な社会変革は、家族とコミュニティの崩壊とそれに取って代わる国家と市場の台頭である。産業革命は２世紀足らずで、人間社会の基本構成要素（家族、コミュニティ）をバラバラにして、国家と市場の手に移してしまった。近代社会は、「弱い家族とコミュニティ」と「強い国家と市場」と「強い個人」の相関関係になっている。

ハラリは近代社会の唯一の特徴として、絶え間ない変化をあげている。今日の政治は、たえず「改革」を謳い続けていることからもわかる。

第二次大戦後の 70 年間は人類史上もっとも平和な時代であったことは確かだ。総体として暴力の低減が目立っている。2002 年の 5700 万人の死亡者のうち、戦争によるものは 17 万 2000 人、暴力犯罪による死亡者は 56 万 9000 人にすぎない。自殺者はこれに比して 87 万 3000 人にのぼっている。国家と市場が全権を握り、コミュニティが消滅したこの数十年に暴力の発生率は一段と下落した。現在、殺人の世界平均は人口 10 万人当たり年間 9 人で、ヨーロッパ諸国に限ると 1 人である。1945 年以降、国家間の武力衝突は減少している。帝国の大半はすでに撤退した。1989 年のソ連崩壊も概ね平和裏に姿を消した。国家間の戦争の可能性は低減しており、また戦争により得られる利益は減ってきている。また人々の間で、戦争は悪であり、回避すべきだという考えが広がっている。

▼文明は人間を幸福にしたか

近代は人間に幸福をもたらしたか否か。こうした問いは歴史学者が避けてきたものだという。著者は敢えてこの問いに向き合おうとする。近代はサピエンスが成し遂げた偉業を数えあげることができる。しかし、他のあらゆる動物たちの運命をまったく考慮しないものだった。幸福の計測を上級階級のヨーロッパ人、男性でみるのではなく、また人類だけの幸せで測るのも誤りだと著者はいう。過去２世紀の物質面の改善は、家族・コミュニティの崩壊によって相殺されるのではないか。幸福は客観的条件だけでなく、主観的な期待との相関関係で決まる。では、その主観は、私たちの精神的・感情的世界がもたらすものだ。それは長い進化過程で形成された生化学的な反応に支配されてもいる。それは、神経、ニューロン、シナプス、さらにセロトニン、ドーパミン、オキシトシンといった神経伝達物質やホルモンに

よってつくられている複雑なシステムで決まる。このシステムは一人ひとりで異なる。陽気な生化学的特性を持つ人もいれば、陰気な特性を持つ人もいる。そこでは歴史など、さして重要ではなくなる。そうなれば、オルダス・ハクスレーのディストピア小説『すばらしい新世界』のような世界になってしまう。幸福を至上の価値とし、合成薬「ソーマ」で幸福感を与えるといった世界だ。こうした幸福感に異議を唱える人もいる。ダニエル・カーネマンは幸福には重要な認知的・倫理的側面があるという。例えば、子育ての苦労があったとしても、子どもこそが幸福の源泉だと感じている。有意義な人生は困難の只中にあっても満足を得ることができる。無意味な人生は、快適な環境に囲まれていても厳しい試練となるという。幸福はある種の主観的な感情である。そうであるならば、しあわせの感情状態の追求とみることができるのか。しかし、宗教や哲学は、しあわせの鍵は真の自分を知ることだという。いずれにしても幸福の歴史への問いは始まったばかりで、この欠落を埋める努力が必要だと著者はいう。

▼サピエンスはどこへ向かうのか

サピエンスはどんなに努力しても生物的限界を超え出ることはできない。これは暗黙の了解事項であったが、21 世紀に入り、その限界を超えつつある。サピエンスは自然選択の法則を打ち破ろうとしている。その後釜に知的設計を据えようとしている。過去 40 億年近く、地球上の生物は自然選択の影響下で進化してきた。確かに農業革命は育種や家畜の交配など行っており、自然選択のシステムに亀裂を作り出したかもしれない。しかし、今日の遺伝子工学による知的設計は、緑色に蛍光発光するウサギをつくりだしている。まさに生物学的革命の時代になりつつある。古代マンモスのゲノム解析からマンモスの再生が目論まれている。ネアンデルタール人のゲノム解析からネアンデルタール人の子どもの誕生が可能だといわれている。人間の知的能力や情緒的能力まで改変が行えるようになるかもしれない。第二次認知革命を引き起こして、新しい種類の意識を生み出し、従来のサピエンスと異なるものへと展開していくことになるかもしれない。新しいテクノロジー、サイボーグ工学は生命体と非有機的器官を結合させる分野で、例としては、バイオニック・ハンドが、すでに造られている。脳とコンピュータを直接結ぶ試みも研究されている。脳とインターネット、複数の脳を結ぶインター・ブレイン・ネットが誕生するかもしれない。医療分野では DNA 解析に基づいてオーダーメード医療の試みが検討されている。私たちは新たな特異点（シンギュラリティ）は急速に近づいてきているのかもしれない。核の大惨事、生態学的な大惨事といった事態が起こらなければ、テクノロジーはこのまま発展を続け、サピエンスは異なる体型だけでなく、異なる認知的世界や情緒的世界をもった異質な存在に取って代わられるのだろうか。私たちが真剣に受け止めなければいけないのは、歴史の次の段階には、テクノロジーや組織の変化だけでなく、人間の意識とアイデンティティの根本的な変化も含まれるということだ。「人類」という言葉がその妥当性を問われる時代になるかもしれない。

（三室勇）